

吉原直樹著

『モビリティーズ・スタディーズ』

——体系的理解のために』



評者：根岸 海馬

グローバル化が進む中、ヒトやモノの移動の拡大を反映して、モビリティーズ・スタディーズに対する関心が高まっている。加えて、新型コロナウイルスの世界的蔓延で、都市封鎖や移動制限が人々の生活に大きな変化をきたしたことは、モビリティがいかに関々の生活に深く関わっているかを示すものであった。物質的空間および非物質的空間における「移動性」を主な分析対象とするモビリティーズ・スタディーズは、イギリスを中心とする英語圏で2000年代以降に発展し、現在、日本でも人文地理学、社会学、観光学の分野を中心に受容が進んできた（小川（西秋）他2020；遠藤2017）。本書『モビリティーズ・スタディーズ——体系的理解のために』の著者、吉原直樹は、コミュニティ・地域社会学の分野で優れた著作を数多く発表している社会学の泰斗であるが、『モビリティーズ——移動の社会学』（J.アーリ著、原著2007＝邦訳2015）の邦訳を手掛けるなど、日本におけるモビリティーズ・スタディーズ研究推進の中心となってきたことでも知られている。本書は、そうした著者が長年にわたる研究蓄積を存分に活かしながら、モビリティーズ・スタディーズに関するこれまでの仕事を総括した著

作である。以下では、本書の内容を章ごとに紹介しながら本書の全体像を把握し、本書の議論に対する論点を挙げて考察を深めたい。

本書の内容

本書は全三部で構成されている。著者はまず、第一部（第1～2章）で本書の問題意識を明らかにする。それは、「社会的（ソーシャル）なもの」を再措定し、多元的な社会を理解するための方法論を提起することである。まず第1章で著者は、B.ラトゥールを引きながら「社会的なもの」を捉える方法を本書の中心的命題に据える。著者は、「科学的」方法を志向する社会科学が、主に社会の可視化されるもの、平準化可能なものを捉えてきたことを批判し、「連関性」（結びつき・つながり）そのものを捕捉し表現することの意義を主張する。それは、I.ウォーラステインが提唱した「脱＝社会科学」を継承しつつ、社会の多元性を探求する方法である。

第2章は、方法論の議論を中心に展開される。本章で著者は、H.ルフェーヴル、D.ハーヴェイ、E.ソジャによる議論を概観しながら、社会事象を「領域的なもの」、「不動（ア・モバイル）なもの」として捉える思考、著者が「線形思考」と呼ぶ思考を批判する。グローバル化が進展する世界では、「領域」や「固定されたもの」は、しばしば埋め込まれていた文脈から外へと広がり、その境界を動かす。そのため空間は常に境界の移動を伴い、差異化・重層化しながら、関係的なものとして立ち現れる。こうした点を指摘しながら著者は、「移動をベースとする社会科学」の土台として「非線形思考」を据えようとする。

本書の中心となる第二部（第3～7章）で著者は、ハーヴェイ、A.ギデンズ、ルフェーヴル、G.ジンメル議論における空間・時間概

念を再訪し、そこにモビリティーズ・ターン（「移動論的転回」）の「水脈」を見出す。そしてこれらの検討を通じて、現代におけるモビリティを理解するための新たな方法論が模索される。

まず第3章で著者は、続く各章で展開される議論への出発点として、近代をいかに認識するかという問いを提起し、「線形思考」を乗り越える手掛かりとして「モダニティの両義性」を論じる。著者によれば、近代の時間性と空間性の支配的言説（マスターナラティブ）には、主体を埋め込む規律装置としての「絶対的時間（クロック・タイム）」と、測量的な空間認識としての「幾何学の連続的空間」の両方が内在している。しかし、グローバル化が進む現代では、時間と空間の差異化／分節化が進行し、「生きられた空間」や「時間の広がり」といった時間・空間感覚の質的な多様化・複合化が進んでいる。つまり「線形思考」には収まりきらない新しい時間・空間感覚が生成し始めているのである。

第4章では、ハーヴェイの『ポストモダニティの条件』（原著1989＝邦訳1999）における「時間・空間の圧縮」の議論が、ギデンズの「時間・空間の距離化」に對置される。この両者の検討を通して著者は、モダニティが時間・空間の「均質化」装置としてだけではなく「差異化」装置としても機能することを確認し、モダニティの両義性を重ねて強調する。市場経済が拡大・進展する中で「社会活動が『時間と空間』を共有しない人々の間での相互作用にますます依存するようになっていく」こともまた、現代世界の特徴なのである。

このように変容していく空間・時間概念の中で、身体はどう位置付けられ、その関係性の構造はいかに推移するのか。著者はその解を第5章のルフェーヴルに求める。著者によればル

フェーヴルは、空間を捉えるために「空間の実践」「空間の表象」「表象の空間」という三次元を提示し、それぞれが身体を介して「知覚空間」「思考＝概念空間」「生きられた空間」として経験されると論じた。著者はこうしたルフェーヴルの議論を通じて、身体は常に「空間的身体」であることを指摘し、身体それ自体が空間の差異化装置として機能すると論じる。これは、ルフェーヴルの空間社会論を捉えなおすことで、空間を社会的生産・実践の中に位置づけ、モビリティーズ・スタディーズの理論的な発展につなげようという試みである。

第6章では、都市の人々の動的な相互作用を描いたジンメルの都市空間論の再検討が行われ、これにモビリティーズ・スタディーズのもう一つの「水源」が見出される。著者は、ジンメルの都市認識の核心的概念として「悟性」と「自己保存」を挙げ、それらの再解釈を通して、近代的都市空間における個人の組織化とそれと一定の距離を保ちつつ存在し続ける個人的自由を理解しようとする。著者が都市に期待するのは、共同体と共同体の間を「つなぎ媒介する」メディアとしての役割、すなわち相互的な関係性のインターセクションとしての役割である。

第二部の最終章となる第7章では、グローバル化に対する反グローバル化運動、特にコロナ禍以降の国民国家の復権を捉える視角として、「非線形の社会科学」の意義が改めて強調される。著者によれば、現代世界における多元的な分岐・選択、史的依存性、内在的不確実性を理解するために必須のものであり、社会科学を一步先へ進める推進力となるものでもある。

本書の最終部分をなす第三部（第8～11章）で著者は、第二部で確認してきた方法論的枠組みに依拠しつつ「経験的世界」の分析を行い、モビリティーズ・スタディーズの可能性と限界を模索する。

第8章では、海外日本人コミュニティの形成とその動態を「非線形の社会科学」の方法によって分析し、定住主義（セデンタリズム）に基づいた移民研究の境界を越えることが試みられる。ここでは、従来の移民研究を形作ってきた単線的な二分法への批判が行われ、「定住」と「移動」の間、「マジョリティ」と「マイノリティ」の間を行き来する移民の生きた姿が描かれている。移民が各々の文脈の中で「生活者」としてつながり合う様を描くことで、著者は、多様な主体の存在論的現実を研究に反映する必要性を指摘する。

第9章では、2011年の福島第一原子力発電所事故後、避難／移動し続けることを強いられる「エグザイル」としての避難者／コミュニティを取り上げる。著者は、彼・彼女らの通時的・共時的経験を、効率や結果に還元されえない「移動しゆらぎながら成り立つ共同性」の一例として析出する。著者は、避難者／コミュニティが、「弱い」つながりを通して「決めずに待ち、移動し続け」、「中間的状况」に身を置き、離散と集合を繰り返しながらも、「いま・ここ」に存在し続けていることに注目する。自己の自立性を失いながらも、選択を保留しつつ移動し続ける人々に、著者は弱い関係性の可能性を見出す。

第10章は、「オートモビリティ」の意味を検討する。「オートモビリティ」には、自動車をめぐる「自由で私的な移動方法」という語りと、それに対抗する「監視・追跡装置としてのシステム」という語りが存在する。前者は自動車の近代の表象であり、後者はモビリティのデジタル化で高度な監視・追跡が可能となる超近代的現実である。著者はこれらを批判的に取り上げ、こうした二分法的な語りの外部に、人々が共有する「生きられた空間」を見出そうとする。

第11章では、現在の社会情勢に議論が移り、未来を見据えた提言がなされる。「ウィズ・コロナ」下の社会で人と人との関係性が次第に希薄なものとなる中、人々の行動は常に監視されるようになり、社会的紐帯が脆弱化した。そうした中、都市の再整備やスーパーシティ構想、デジタル技術による人々の一元的な監視・管理システムが構築されつつある。これらに抗して、都市の雑多性や複雑性を維持するためには、「地域的な知」を「生存の知」として再生し、それを都市イノベーションに組み込むことが求められていると著者は強調する。

本書の論点

ここまで本書の各章を概観してきた。以下では、本書の提起する問いをさらに深めることを目的に、論点を3点に絞り、評者の視点から掘り下げる。そして最後に、本書に対する論点を提示したい。

(1) モビリティーズ・スタディーズの発展に向けて

冒頭にも述べたように2000年代に英語圏を中心に始まったモビリティーズ・スタディーズは現在日本でも受容されつつあり、本書はそうした日本におけるモビリティーズ・スタディーズを牽引する先駆的な著作となっている。本書は、世界中で展開するヒト・モノ・カネ・情報の移動（モビリティ）と停滞（インモビリティ）のありようと、それらが生成する時間・空間に光を当てようとする。著者が述べるように、従来の社会科学には隠れた前提として定住主義（セデンタリズム）があり、そのため従来の社会科学ではヒトやモノの移動——移動そのもの、移動しているその時間、空間——は看過される傾向にあった。移動の状態にあるヒトやモノなどはしばしば暗黙の裡に研究対象から除外

され、移動の前と後ろ、出発点と到着点にのみに焦点が絞られる傾向にあった。これに対して、本書は世界を「動的」なものとして捉え、多様に同時に展開する移動と停滞、そしてその間に注目する。著者が「移動論的転回」と呼ぶこうした視点の転換は、ヒト・モノ・カネ・情報の絶え間ない移動とその停滞が社会現象の非常に重要な部分を構成する現代において、社会を理解するのに不可欠であると言える。

(2) 「脱＝社会科学」の方法論

また本書は、方法論という点でも重要な視点を提供している。著者が本書の核心に据える「非線形思考」は、社会科学が前提とする「原因→結果」という因果関係図式による現実世界の平準化を退け、多様に存在する連関性を取り戻す視座として、すなわち一つの社会科学批判として位置付けられている。著者は、アーリの「創発 (emergence)」という概念に依拠しながら、組織体系を構成する要素がそれぞれ間の相互作用をとおしてみずから創り出す（創発する）現象を指し、その相互作用は、組織体系を超越して働き、融合・融解を重ねながら常に変化し、ある社会的過程において具現化するという「集合的な特性」を持つという。

著者が主張するこうした方法論は、近代知／権力としての社会科学に対する非常に深淵な批判となっている。ウォーラーstein (1996) の「社会科学をひらく」方法論などを嚆矢として、1990年代以降、「社会科学」への異議申し立てが活発に行われてきた。そこでは、従来の社会科学がその内側に西欧中心主義、男性中心主義、人間中心主義を据えてきたこと、その結果しばしば一部の主体が特権化されてきたことが指摘され、そこで生成された知識体系の「価値中立性」にも疑問が投げかけられるようになっていく。

本書に登場するアーリの議論やアクターネットワーク理論もこうした方法論論争から生まれたのであり、モビリティーズ・スタディーズも、近代知／権力としての社会科学に対する批判として成長してきた。従来の社会科学が「定住主義」や「静的な社会」を前提としてきたのは、単に移動するヒトやモノ、それらが作り出す社会事象を見落としてきただけではなく、そうした知の在り方自体が遍在する権力によって生み出され、それを補強してきた面を持つ。移動を社会分析の中心に据えるという本書における著者の試みは、こうした社会科学の批判的探求という意味でも非常に有意義な営みなのである。

(3) 時間・空間を捉える方法

このように新たな方法論を模索する一方で、著者は、モビリティーズ・スタディーズを深く理解するには時間・空間概念を論じる古典（ハーヴェイ、ギデンズ、ルフェーヴル、ジンメル）の「読みなおし」が必要であると強調する。グローバル化の中で進む時間・空間の再編成を踏まえた移動性の理解において、これらの議論を再訪することは非常に有意義であるといえる。著者はまた、ヒトやモノの関係性の「創発」的側面に言及し、それを古典の議論の中に見出そうとする。この視角は、他のモビリティーズ研究者には見られない著者独自の斬新なものである。

しかしながら、本書の事例分析において、この視角は貫徹されていない。それは、著者が都市空間や共同体を分析する際に、「創発性」が生成する契機としての「いま・ここ」の一過性・偶然性、情動や空気-秩序（アトモスフィア）の働きが捨象されているためである。しかし、こうした非-表象の次元の捕捉を通してはじめて、現代社会における移動性の包括的理解

が可能になるのではないだろうか (Anderson & Harrison (eds.) 2010)。これを踏まえ、近年、時間・空間における非-表象の側面の重要性が盛んに議論され、それを捉えることを目的に新たな調査方法の模索が始まっている——この成果として、オートエスノグラフィーやビデオグラフィー、サウンドスケープなどが挙げられる。このように、移動性の更なる解明を可能にする方法の探究は、今後のモビリティーズ研究に与えられた最重要課題であるといえる。

おわりに

現在、日本をはじめとする非西洋圏でもモビリティーズ・スタディーズの広がりが見られる。この研究分野は、イギリスをはじめとする英語圏を中心に発展してきたという背景を持つ。そのため長い間、その理論体系や事例は西洋に根差したものが圧倒的多数を占め、非西洋を構造的に排除してきた。他の多くの学問分野と同様、モビリティーズ・スタディーズにも、西洋圏で生産された理論が支配的言説となり、非西洋圏が事例として「発見」されるという構図が存在する。しかし最近、非西洋圏（特に南米・アフリカ・アジア地域）に広がる多様なモビリティーズのありかたを地域に根差した視点から分析し、モビリティーズの脱西洋中心主義・脱植民地化を進める「オルタナティブ・(イン) モビリティーズ」(Nogueira (ed.)

2022) の試みが現れている。本書もまたこうした試みの一つを構成するものであり、その意味で日本におけるモビリティーズ・スタディーズ発展への寄与以上の意味を持っている。日本でのモビリティーズに関する研究の進展が期待される中、支配的言説・概念体系の単なる受容(輸入)を越える思考の在処として、本書はひとつの起点を私たちに指し示している。

(吉原直樹著『モビリティーズ・スタディーズ——体系的理解のために』叢書・現代社会学⑨, ミネルヴァ書房, 2022年1月, xviii + 282 + 35頁, 定価3,850円(税込))

(ねぎし・かいま 法政大学大原社会問題研究所兼任研究員)

【参考文献】

- Anderson, B. & P. Harrison (eds.) *Taking Place: Non-representational Theories and Geography*. Routledge, 2010.
- 遠藤英樹『ツーリズム・モビリティーズ——観光と移動の社会理論』ミネルヴァ書房, 2017.
- Nogueira, M. A. (ed.) *Alternative (Im) Mobilities*. Routledge, 2022.
- 小川(西秋)葉子・是永論・太田邦史編『モビリティーズのまなざし——ジョン・アーリの思想と実践』丸善出版, 2020.
- ジョン・アーリ『モビリティーズ——移動の社会学』吉原直樹・伊藤嘉高訳, 作品社, 2015.
- イマニュエル・ウォーラーステイン『社会科学をひらく』山田鋭夫訳, 藤原書店, 1996.